

(A) 旧年度の事業報告 -----

■医薬品インタフェース調査研究会

設置期間	2007年4月～2009年3月	
幹事学会	日本人間工学会	
主査	土屋文人	(東京医科歯科大学、日本人間工学会)
副主査	大倉典子	(芝浦工業大学、日本バーチャルリアリティ学会)
幹事	木村昌臣	(芝浦工業大学、日本人間工学会)
委員	青木和夫	(日本大学、日本人間工学会)
	小松原明哲	(早稲田大学、ヒューマンインタフェース学会)
	三林洋介	(東京都立産業技術高等専門学校、日本人間工学会)
オブザーバ	古川裕之	(金沢大学、日本医療情報学会)

平成11年1月11日に起きた手術患者取り違え事故を契機とし、日本における医療事故防止への取り組みが本格的に始まった。以来、厚生労働省主導による各種報告制度や警告制度の整備が進んでいるが、医薬品や医療関係者による検討だけでは、医療事故の防止に効果的な医薬品の表示の指針を明確にすることは難しい。

そこで本調査研究会では、人間工学やインタフェース、さらに横幹連合の各学会から広範囲の知恵を集め、この問題に取組み、医薬品の表示の指針の策定に寄与することにした。

1. 電子情報通信学会安全性研究会の実施

医療の安全をテーマとした電子情報通信学会安全性研究会を、本調査研究会幹事で同研究会専門委員の木村が企画し、2008年5月23日に機械振興会館で同研究会を実施した。講演者は、古川、大倉、三林、木村、土屋。電子情報通信学会安全性研究会委員の先生方を中心として、活発な意見交換が行われた。

2. 第2回横幹連合総合シンポジウムでの企画セッションの実施

第2回横幹連合総合シンポジウムで本調査研究会の企画セッション「医薬品インタフェース」を実施することになり、本調査研究会副主査の大倉が企画した。基調講演者に厚生労働省医療安全調査官の谷地豊氏を迎えて、2008年12月5日に、筑波大学で同セッションを実施した。谷地氏以外の講演者は、三林、大倉、木村、土屋。講演後にディスカッションの時間を設けたが、聴講者も多く、質問も活発で、大変有意義なセッションであった。

3. イベント「製薬企業のための人間工学入門」の開催

日本人間工学会医療安全研究部会との共催で、本調査研究会主査で同部会の部会長である土屋が企画し、2009年3月23日に、上記イベントを東京医科歯科大学で開催した。発表者は、第1部が芝浦工業大学大倉研、木村研の学生、第2部が青木(予定。実際には当日急用のため欠席で、大倉が代行)、土屋。約60名の参加があり、活発なディスカッションが行われた。

4. 「医薬品の使用の安全に関する資料集」の発行

1999年1月11日に、横浜の病院で手術患者取り違え事故が起き、医療安全に対する国の積極的な取り組みが開始されてから、丁度10年が経過した。そこで、本調査研究会と日本人間工学会医療安全研究部会との共同で、「医薬品の使用の安全に関する資料集」をまとめることにした。内容は、医薬品の使用の安全に関する、本調査研究会のメンバーの公表した著作物をまとめたもので、約550ページ。上記イベントに合わせて発行した。

5. その他

数名の委員によるインフォーマルミーティングを、2007年度よりさらに活発化し、2008年から部分実施されている医薬品へのバーコード表示の義務化、それに伴う医薬品の表示の変更、医療従事者の再教育等について、製薬企業や厚生労働省の関係者・医療従事者からのヒヤリング等を実施すると共に、医薬品の表示に関する事例研究も行った。

(B) 新年度の事業計画 -----

■ 医薬品インタフェース調査研究会

2009年度からは、新規の申請となるので、ここには記載しない。